阪神・淡路大震災と文学・文学者（三）

――小田実・田中康夫・金時鐘などの表現行為について――

吉田永宏

（三）田中康夫「神戸震災日記」（承前）

3

《嘘八百の大本営発表》

「ゲンチャリにまたがって」[1]で、震災当日から半年程経った段階での東京の人たちからの「少しは向こうも落ち着きましたか?」との悪気のない質問に対して思わずムカついてしまったとの心情を吐露している。およそ半年の時間が経過し、なる程、阪神間を結ぶ鉄道はどれも全通した。電気、水道、ガスはとうの昔に復旧している。しかし、そんなものは税金を注ぎ込めば元通りになる。問題は「公」の復興ではなくて「私」の復興ではないのか。そうして「公」が落ち着けば落ち着く程、自分だけが取り残されていく焦りとも諦めともつかぬ精神状態に陥る「私」が増えていく。落ち着くとは一体どのような状況を指すのだろう、瓦礫さえ取り除けば事足れりという訳ではなかろうに、との思いからのものである。

七月末には避難所やテントでの生活から全員が解放される、と「公」は胸を張るが、地震四日後から50ccバイクで神戸、芦屋、西宮、宝塚の各市を走り回っている田中康夫にとっては、それが《嘘八百の大本営発表》としか映

らない。現実には、《地下通路の一角をベニヤ板で囲い込んで、兵庫区役所の真下で暮らしている人々がいる。昼間は四〇度を超してしまうテント暮らしの人々に至っては、東灘区の中野南公園をはじめとして数限りない》。その人達は何も好き好んでそのような生活を続けている訳ではないが、しかし、《遥か離れた西区や北区の造成途中の更地に雨後のタケノコのごとく出現した仮設住宅に移ったなら、始発に乗っても早出の仕事に間に合わない。といって、何とかしようと自助努力を重ねても「私」には限界がある》。にも拘らず「公」は、帳尻合わせとしか思えぬ仮設住宅を作るのみである。《器というハードが出来ても、魂というソフトがそこに根付かない。「公」は、バブル期と露ほども変わらぬ発想なのだ》と田中康夫は批判する。

一方、公園や保育所に緊急避難した人びとには不思議と相互に悲壮感はなかったと振り返り、近隣で米穀店や酒販店を営む人びとの無料で供出してくれた物資を二〇〇名近い人びとで分け合った時の嬉しくて涙が止まらなかったことを覚えているとの一人暮らしの女性の言を紹介しながら、田中康夫は、《だが、それらの感動は、地震直後の「非日常」的空間での出来事だからこそ、誰もが共有し得た晴れ（ハレ）の気分だったのではないか。半年後の今、彼らや彼女らにとっては、テントや避難所での生活が「日常」となってしまっているのだ。もはや褻（ケ）でしかない》と冷静に且つ鋭く指摘する。念のための注釈を加えておくと、ハレとはおもてむき、公衆の前、の意であり、ケはおおやけでないこと・日常・私、を表わす語である。「仮設に当たって移っていった人達が時々、戻って来るよ。懐かしいって言いながら」との件の女性の言を引きながら、しかし、それは「隣は何をする人ぞ」の仮設〝寄せ集め〟住宅での「日常」が確保されていればこその「非日常」への懐しみでしかないと受け止めた上で、次のように言い切る。《壁にヒビこそ有れ、建物は無事だった山手の人々に於いては、ガスが復旧して公衆浴場や遠方のサウナまで行かなくとも自宅で風呂へ入れる様になった瞬間、赤の他人を装う結果となってしまった。税金使

えばいとも簡単に直せる電車の全線開通が「復興」の証しだなんてトンデモナイと僕が憤る理由は、ここにある》。

田中康夫は金城竜平君（キンちゃん）を東灘小学校の校庭に幾度となく訪れたことを記している（「キンちゃんに会いたくて」の章）。

保父さん志望の卒業生　東灘小の校庭にテントを張って一家四人で生活していた沖縄出身の金城家の長男・竜平君は、被災後の四月から佛教大学の通信教育課程で福祉を学ぶようになった大学生である。保父さんになるとの夢を持つ彼は避難先の小学校の生徒から「ブーチ」と呼ばれ、慕われている。ところが彼は一見、昼間も校内でウダウダしている訳の判らない青年であり、過剰反応した幾人かの教師達が生徒に〝忠告〟したという。「避難所暮らしを続けているお兄さんと、あんまり遊ばないように」と。保父さん志望のこのお兄さんは、しかもこの東灘小学校を六年前に卒業した先輩なのだ。彼は田中康夫に向かって、「僕、そんなに危なそうですか？　でも、いいです。理解してくれる先生も中には居るし」と自分に言い聞かせるかのように呟いたという。《キンちゃん一家が住んでいた本庄町の自宅は全壊している。父親の芳夫さんも弟で高校生の聡馬君も腕を大きく怪我したにもかかわらず、素手でガレキを取り除いては近隣の人々の救出に当たり、気が付いたら日が暮れていた。自分達も避難しなくては、と東灘小学校へ出掛けると校舎の中は既に超満員で、壊れた家からテントを持ち出して校庭に張ったのだった。／決して後ろ向きな訳じゃない。ローンの返済はまだまだ一杯残っているが、今年の秋には何とか地鎮祭を行いたいと考えている。それまでの間、お世辞にも広いとは言えない敷地にバラックを建てようかとも芳夫さんは考えた。けれども、一帯は整地が終わっておらず、境界を越えているなどと問題も生じ兼ねない。さりとて、家賃が高騰したマンションを短期間だけ借りるのも無駄だ。考えた末のテント暮らしなのだ》。老人も乳児も居ないが故に金城家の優先順位は低く、仮設住宅の抽選に毎回、外れ続けてきた。七月末をもって退去せよ、との初めに

期限在りきの避難所閉鎖まで、残すところ十日余りであった。〔付記〕によると、金城家は最後の抽選でも当たらず、大阪市西淀川区に位置する団地に〝転居〟したという。

震災直後にテント生活を「選択」した被災者の間には、「公」に対する抜き難い不信感の存在することを田中康夫は重ねて強調する。小・中学校の教室や体育館に代表される「避難所」では、遅くとも地震の翌々日からは人数分の弁当や飲料が配給されるようになった。しかしその一方で、公園に代表される空間へ避難した人々は、一週間経っても「公」から物資を貰えなかった例が幾つもあり、それは、避難所の認定を受けていない場所へは届ける訳にはいかないというのが理由であった由である。《何も好き好んで冬の寒い中、公園で寝泊りしていたのではない。既に人で溢れ返っていた屋根付きの避難所へ自分達も押し掛けるのは忍びない。大変かも知れないが協力し合って自分達で出来るところまでやってみよう、と心に決めたのだ。なのに、杓子定規な「公」は、こうした自力本願の人々に前述の冷たい仕打ちをした》と、田中康夫の矛先きはやはり自治体・行政の官僚性へと向けられる。

本稿第一回掲載の箇所でも紹介しておいたが、田中康夫の行動性は被災者への物品の無料提供に如実に示されている。旧知のファッション企業担当者に下着や靴下の提供を呼び掛けてそれを実現し、親しい航空会社や化粧品会社の広報担当者に電話を掛けた上でその本社まで出向いてアイマスクやドライシャンプーの提供をお願いしてそれを実現するといった具合いにである。PR担当の幾つかの外資系化粧品会社に電話で頼むと、「ふうん、偉いですねえ」と冷淡な口調の企業もあり、「既に義援金の形で送ってしまったので」と婉曲に断わられてしまう場合もあった。その中で、二社の担当者の「神戸には私達のお客様も沢山いらっしゃるわ。でも、それ以前に一人の女性として、口紅を塗ることも化粧水を付けることもままならない辛さを何とかしてあげたいの。私達のお客様であるかどうかに関係なく」との頼もしい反応を得ることが出来た。ところが、数日後の再度の電話に対して彼女は、

「お話を戴いて、全社的に盛り上がったの。田中さんを通じて、是非、神戸の人達のお役に立とうって。でも、税金の問題で暗礁に乗り上げてしまって……」と落ち込んだ応対ぶりである。税金とは一体何の話なのか、田中康夫には全く理解出来ず、詳しい説明を求めたところ、「個人である田中さんに化粧品をお渡しすると、贈与と見なされてしまうらしいの」と、各々フランス系企業の二社でPRを担当していた女性は二人共、同じ悩みを打ち明けてきたという。《赤十字や兵庫県といった「公」への寄付は税金の減免措置があるらしい。けれども、「私」である僕へ手渡すと、仮にその宛先を「田中康夫ボランティアグループ」といった団体名にしたとしても、送り手の企業側は免税どころか損金扱いにも出来ず、受け手の僕は税金を支払わねばならぬ羽目に陥ってしまうらしい》。ほんの少しでも潤いの感じられる瞬間を被災者の方々に提供出来たならという当事者達の純粋な思いが、税務上のトラブルを巻き起こし兼ねないとは、なんたる皮肉であろうか。一旦、赤十字か何処かへ届けて、それを田中康夫が引き取る形にするのは難しいか？　種々方策を考えてはみるものの、《そんな物分かりの良さは「公」になんて期待出来まい》という所に落ち着いてしまう。すっかり袋小路に入ってしまったが、二月十五日付の夕刊に載っていた記事がその行き詰まり状態を打開してくれた。《今回の震災に関しては特例として、企業がボランティア団体や個人へ提供した金品を損金扱いにすることができる》という内容のものであった。但しそれは減免措置とは異なるものであるという。

賃貸マンション　この「ゲンチャリにまたがって」には各章毎の末尾に幾つかのデータ的事柄が記されている

の便乗値上げ　が、その中に便乗値上げの事実が紹介されている。震災後、大阪市内などの賃貸マンションに人びとが殺到したが、これに便乗して賃貸料を値上げする大手不動産会社があり、地震二日後には五万五千円のワンルームマンションを、その三日後には八万五千円に値上げした。他の物件も軒並み一万～三万円アップし、保証

金も五万～十五万円の幅で値上げしたという。企業が一括して家を確保したため、供給が激減状態になったことに拠るという。俗に言う他人の足元を見ての商法であるが、資本の論理が人間を何処まで非情な存在に陥らせてしまうか、その典型とも言える話題である。

ＴＶの〝絵となる報道〟を追求する姿勢をも田中康夫は告発する。

ＴＶという媒体は、都合の悪い部分を綺麗に見せてしまう術に長けた媒体である。それが今回の震災では裏目に出てしまったと言う。ラジオや新聞は、動く絵の無いマイナス分を補うべく、凄惨窮まりない眼の前の状況を如何に詳細且つ正確に言葉で伝えようかとその表現に腐心したが、ＴＶは《身を切る程に冷たい一月の風やケミカルシューズ工場の焼け跡の臭いやガレキと化した民家の土埃を、視聴者に伝えられなかった》と言い、その実例として、地震発生当日、各ＴＶ局が、途中階が崩れ落ちて何十名かが生き埋めとなった西市民病院からの〝ドラマ〟を生中継したことを示している。《病人・生き埋め・救出・生還。その報道自体にケチを付けるつもりは毛頭ない》と断わりつつ、しかし、取材班は大阪市内の局舎を出発して三宮よりも更に西へ進んだ長田区一番町の現場に到着するまでの道すがら、三宮よりも遥か手前の東灘区や灘区では、倒壊した一般家屋の下敷きとなって、それこそは何千名もの人びとが悲痛な叫びを上げていた光景を眼にしている筈だ、と言う。そうした惨劇は、取材の道中に当たる国道2号線沿いでも数限りなく起きていたし、素手で瓦を取り除き、柱を持ち上げて救出しようと力を合わせていた人びとの姿も、取材班は目にしている筈だ、と言う。《だが、彼らを乗せた中継車やロケバスは一路、西市民病院へ向かった。〝絵になる報道〟を撮る為に。だから、道路一本隔てた二番町や三番町でも数多くの人々が生き埋めとなっていたにもかかわらず、西市民病院ばかりを映し出した。阪神高速道路の倒壊現場へ向かった取材班とて同様だ。すぐ北側の東灘区深江本町で生き埋めとなった人々を助け出そうと奮戦する地下住民の勇姿が映し出

されることはなかった。／ベターッと木造家屋の倒壊が広がる〝だけ〟の光景では地震の衝撃が伝えられない、と彼らは早とちりしたのだ。病院や高速道路の方が〝絵になる〟と判断したのだ。犠牲者の多寡という結果のみをもって、西市民病院よりも隣接する二番町や三番町へとカメラクルーを移動させるべきだった、と僕は申し上げているのではない。衝撃の映像ばかりを追い求める中で、報道の本質が忘れ去られてしまう事を危惧しているのだ》と告発するのである。

〝絵になる報道〟への批判は、「〝絵になる〟復興」の章に於てもまだ続く。「菅原市場ばっかし、どうして映しはるんやろね、田中さん」と尋ねられたことが何度もあるという。菅原市場というのは、神戸市長田区菅原通、御蔵通なる二つの地名の各三～四丁目に跨って広がる市場である。確かにこの市場の状景はかなりの期間にわたってTVが繰り返し映し出した。しかし、この場所よりも更に激しく、しかも広範囲にわたって焼失した場所は何ヶ所もある。長田区に限ってみても、御船通四丁目、若松町三丁目、水笠通六丁目、戸崎通三丁目と列挙出来るとした上で、田中康夫は、《なのに、菅原市場ばかりが取り上げられたのは何故か？　それはTVの画面に収まり易い〝絵になる〟衝撃だったからだ。水笠通六丁目は辺り一面が焼け野原だ。何もない。その場に立ったなら、誰もが言葉を失うはずだ。けれども、モーションであれスチールであれ、四角に区切られたファインダーを通して眺めると、一転して〝迫力〟が感じられなくなる。何も残っていないから、単にのっぺりとした平面的焼け野原に思えてしまう。／震災直後の菅原市場は立体的だった。焼けただれたアーケードの鉄柱が残った。その根元には辛うじて姿を留める自動販売機の残骸が立っていた。焼け野原はその向こうに広がっていたのだ。判り易い構図だといえる》。菅原市場は倉庫街や工場地帯と異なり、そこで人びとが暮らしながら商いを行なう生活空間であったのであり、テント、プレハブと仮設店舗の形も変化を遂げながら、魚や野菜を売り捌く人とそれを買い求める人が集う。これま

た確かに〝絵になる〟復興には相違ない。菅原市場の人びとに対しては何の含むところもないと断わった上で田中康夫は、《だが、真に衝撃を伝えたかったなら、何もない焼け野原をも積極的に映し出すべきではなかったか。仮に〝迫力〟を伝えられなかったとしてもそれはTVの敗北などでは決してなく、逆に果敢なる挑戦として評価されたはずだ》と主張し、その上で、《菅原市場ばかりでなく他の商店街へも積極的に訪れて、その復興振りを映し出してあげるべきではなかったか。それこそは、被災地全体への支援というものだ》との自説を展開し、だがそれは《中継車の後ろから黒塗りの車を連ねて大渋滞の中、点から点へと行き慣れた場所を〝定点〟観測移動するだけだったTVの人々には、いささか酷な要求かも知れない》との解説をそれに付すことも忘れてはいない。

作られた報道画面　欲望（必ずしも視聴率を狙ってのみのものではなく、属性としての本質的な要素もあろう）が働き、やらせをその典型とする作られた報道画面も存在しよう。例えば、今年5月10日に放送されたNHKの「プロジェクトX」の「ファイト！　町工場に捧げる日本一の歌」に見られた問題もそれに該当する。内容は、大阪府立淀川工業高校（大阪市旭区）に一九七九年に赴任した新人教員が部員を集めて合唱部を作り、全国コンクールで金賞を獲得するに至るまでの奮闘ぶりを描いたものである。『朝日新聞』（二〇〇五年五月二十三日付夕刊）によると、番組は、「30年前、淀川工業は荒れていた。けんかに暴走、退学者は毎年、80人になった。そこに、1人の新米教師が飛び込んだ」と表現し、暴走族の走行シーンの映像も放映され、初めて挑んだ合唱コンクールの状景を「会場にパトカーがやってきた。警官が生徒たちをにらんだ」と描き、主催者が「淀川工業だろ。舞台で暴れられては困る」と言ったとした。放送後、同校には卒業生を中心に「そこまで荒れていた事実はない」との指摘が複数寄せられ、学校としても、番組内容が事実と異なるとしてNHKに抗議し、「荒れに荒れた」などの表現に遺憾の意を示

して抗議した上で内容について質問状を出し、再放送の取りやめなどを申し入れたという。NHKが局内調査を基に明らかにした、行き過ぎた表現や事実誤認は、主に四点あり、そのいずれもが当該校に対する差別意識に基づく思い入れがその根底にあって看過し得ないものである。『朝日新聞』（五月二十六日付）によると、《①「けんかに暴走」というナレーションにつけた暴走族の資料映像は行き過ぎだった②退学者について「毎年80人にのぼった」とのナレーションは、担当者の思い込みで、裏付けのない数字を使った③「就職先は町工場。求人はなかった」とのナレーションは当時の生徒さんの不安な気持ちを表現しようと思い、過剰な表現をしてしまった。学校全体のことのようにしてしまった④合唱コンクールに警官が来るというシーンについては、顧問の先生の証言を基につくったが、顧問の先生から「冗談のつもりで言ったのにお互いに思い違いでしたね」と放送後言われた。合唱連盟への事実関係の確認を怠った、と誤りを認めた》との四点が、NHKの弁明する自らの事実誤認である。「番組は、同好会から部になる（昇格するの意―引用者）までの3年間の様々な苦労を描き、教育現場への応援にしたかった」というのが原田豊彦・放送局長ら幹部の謝罪の中で語られているNHK側のテーマではあるが、そのために内容にドラマ性を持たせようとの意の働くあまり、実在しなかった劣等な状態を創造してしまったのであろう。繰り返すが、その際に思い込みの基盤をなしていたのが差別意識であったのである。顧問の先生の「冗談のつもり……」の言も、文脈の上からやや不明なものであるが、軽率の責は免れ得まい。今回の件に関連しての『朝日新聞』への投書（五月二十九日付）を一通紹介しておく。投書者は大津市在住の六十四歳の男性である。《（「プロジェクトX」に）かつて私の勤めていた繊維会社の人工皮革や特殊な糸の開発秘話が取り上げられたことがあった。とても楽しみにして見たが、その内容は「ウソではないけれど、事実を知っている者には随分脚色されているなあ」であった。OB連からも電話で「本質をはぐらかしている」「ゆがんでいる」の声があった。／感動ドラマに仕立て上げるた

めに、ごく一部に焦点を当てたもので、何とも後味の悪い印象が残ってしまった。／それ以降は、他のプロジェクトXも同様なバイアス（偏り）がかかっているとの認識を持って見るようにしていたが、今回の報道に「やはり」の思いを新たにした。昨今はドキュメンタリー番組だけでなく、日々のニュースについても、バイアスがかかっているかも知れないと考えるようになっている》。

東神戸朝鮮初中級学校　東神戸朝鮮初中級学校は、ＪＲ灘駅から程近い中央区脇浜町に存在し、道を隔てて東側は灘区岩屋北町となる。白熙奎校長は、「生徒の声が喧しい」「校庭の土埃でいがらっぽい」等々の日本人近隣住民からの苦情を何かと受けること多く、長年に亘る悩みを抱えていたという。文化祭を始めとする学校行事の日には、必ずと言ってよい程、「焼肉臭くて、たまらんわ」との電話が殺到した。昼食時に父母と児童・生徒、教職員が一緒になって肉を焼くのが恒例となっていたからである。その都度、白校長は黙って頭を下げて回った。「喧嘩を売ってる訳ではありません。地域の一員として、皆さんと仲良くしたい気持ちは山々です」と心の中で呟きながらのことであったが、理解を得るのは至難の業であった。「東神戸朝鮮初中級学校のいい話・つらい話」の章で、震災をめぐっての同校と隣接地域の日本人、更には自治体との関りを田中康夫は取り上げている。

地震発生の一月十七日、白校長が学校に駆け付けると、既に何人かの同胞が、敷地内に避難していた近隣の「日本人」の中から幼い子供を見付け出してはスクールバスの中へと誘導していた。エンジンをかけたバスの中で暖を取らせようと考えたからである。この日、五〇名程の同胞と、その三倍には上るであろう日本人避難者とが共に一夜を校庭で明かした。

翌日の夕刻、「公」からの最初の救援物資である少量の沢庵が届き、その分配に頭を痛めている最中に大音響が聞こえ、政治結社の街宣車かと身構えたところ、京都の朝鮮人同胞らが救援物資を満載したトラックでやって来て

くれたのである。《大音響は、被災者を勇気づけようと彼らがスピーカーから流していた音楽なのだった。早速、握り飯を配給する。例の沢庵も、ようやっと役立った。続いて、毛布を配った。／これを皮切りに、各地の同胞が続々と訪れて来る。国籍の違いに関係なく、何れの物資も避難者で分け合った。そうして、地震前から敷地内で湧き出ていた地下水も積極的に提供した。ハンドマイクで呼びかけて回ると、倒壊を免れた周囲のマンションに留まる人々や、灘駅の脇にある県立青陽東養護学校へ避難した人々が列を成した》。その数日後、「同胞避難者」の大半は各々の自宅へと戻る。《多少無理をすれば地震直後から踏み止まることも出来た範囲の被害ではあった彼らや彼女らは、が、戦後間もなくに在日一世らが辛苦の思いで作り上げ、自分達も在籍した愛着のある学校を是が非でも守らねば、との思いから駆け付けたのだった》。その後の東神戸朝鮮初中級学校には、戻る場所が直ぐには見付からない灘区岩屋北町の被災者達が残ることになる。断るまでもないことではあるが、残留したこの被災者たちは無論日本人の神戸市民である。白校長は躊躇うことなく校庭を引き続き開放することを決める。当然のことだと思ったが、「公」が〝難癖〟をつけてきた。実は「公」の〝難癖〟は既に地震の翌日、救援物資の沢庵が届いた時点から始まっていたのだという。《東神戸朝鮮初中級学校が位置するのは中央区脇浜町。西側には神戸製鋼所の敷地が広がる。そのこともあって、校庭に集まった〝同胞〟以外の避難者はいずれも、道路を隔てて学校よりも東側の灘区岩屋北町の人々だった。／「日本」の学校ではない場所に、当初、神戸市からの救援物資が届く気配は感じられなかった。「自分達は致し方ない」。校長の白熙奎さんは思った。学校が心配でそれぞれに自宅から駆け付けたのだから、と。だが、外国人学校が避難所として「公」から認定を受けていようといまいと、そんな違いには関係なく、近隣からの避難者には配給があって然るべきではないか》。そこで灘区役所にその不当性を訴え掛け合ったが、反応は鈍かった。中央区役所に主張すべきだと官僚的答弁を返され、そうではない、あなた方の区民が避難している

のだと岩屋北町七丁目の町内会長と共同で訴えて、漸く〝越境〟区民にも配給されるようになった。校門脇に張った運動会用のテントが、それら救援物資の保管場所として活用されることになった。損壊の程度差こそあれ少なくとも倒壊を免れた建物に住んでいた人びとは、電気・水道・ガスの順序で復旧が進むにつれて校庭を離れ、自宅へと戻って行くようになる。その多くの人びとが「有り難う」と向こうから握手を求めてきてくれたことを白校長は本当に嬉しかったと述懐する。その後も、救援物資のテントへと日本人である彼や彼女らが訪ねて来る度、ごく自然な感じで挨拶が交わされるようになったという。白校長の以下の感懐の弁を田中康夫は書き留めている。「在日一世が戦後に作り上げた、私達朝鮮の人間にとって思い出が一杯の校舎は、御覧のように建て直さなくてはいけない程、激しい被害を受けました。でも、得たものは大きかったです。どんなに一所懸命、歩み寄ろうと心懸けても、これまで叶わなかった近くの人々との友情が、地震によって生まれました」。文字通り雨降って地固まるであり、災を転じて福と成す、である。取り壊しの決まった校舎の片付けを父母総出で行なった三月十二日（日曜日）、この〝集い〟に参加した田中康夫に、「皮肉なものですね」の一語を付け加えながらも白校長は自信を持った表情で語った。《何か所にも分かれて父兄、児童・生徒、教職員が昼食を摂っている。お握りとキムチ、そうして様々な部位の肉を炭火で焼いている。煙モウモウだ。以前だったら、苦情の電話が殺到したことだろう。が、テントで救援物資の管理を交代で行なっている岩屋北町の住民も、ニコニコしながら見守っている。「良かった、良かった」と僕も心の中で呟こうとした》。ここまでの推移はプラスのベクトルを持つものである。しかし、完成したばかりのプレハブの仮設校舎を指差しながらの白校長の表情は強張っている。

八月六日（日曜日）の夕方、田中康夫は久し振りに同校に立ち寄った。その日は長田区よりも西の須磨海浜公園で開催された在日朝鮮人のお祭りがあり、年一回、兵庫県下各地から一〇〇〇名近い人びとが大集合し、その年も

バザーなどで盛り上がった。ＰＴＡ役員の李康美さんと李信子さんがスクールバスから荷物を下ろしているところで、会長の李康美さんが話しながら、「ちょっと中を見て欲しいのよ」と二階建ての仮設校舎を指差し、「子供がね、（ＴＶのニュースで仮設校舎が映し出されているのを見て）ショック受けてましたよ。僕らとこと違って、日本の小学校は仮設にもクーラーが付いてるんだ、って」と言う。少し長くなるがその内容を以下に引用しておく。《全壊認定を受けて既に取り壊した鉄筋三階建てに代わる新しい校舎を二年以内に竣工させる計画がある。それもあって、仮設校舎は二年の期間でリースを受けたプレハブだ。費用は父兄及び全国の同胞からの支援で賄っている。出来るだけ節約して、新校舎へと資金を回したい。その建設に関しては、国庫からの補助も有るにはある。が、その比率は、文部省が査定した建設費用の五〇％だ。資材も工賃も高騰している神戸では、実質三〇％を切ってしまうだろう。各種学校に対する補助と同率なのだ。二人は僕に訴えた。「国籍こそ朝鮮だけど、私達、税金は日本人と同じです。この学園は花嫁学校とは違う。義務教育を受ける年齢の子供達の為にあるんです」／黙って頷くしかなかった。とは言え、思わずジーンときてしまう〝いい話〟を、この後に聞いた。建設資金に苦慮しているとの新聞記事を読んだ四〇代の夫婦が、東京の朝鮮学校を通じて五〇〇万円もの寄付を申し出てくれたのだ。マイホーム購入の為に貯めていた虎の子だった。／朝鮮半島に縁がある方ではない。「子宝に恵まれなかった自分達は、これからも慎しく暮らしていけば良いのだから」と二人で話し合って決めたのだ。名前を尋ねても、千葉県に住む共稼ぎの教員夫婦ということしか明かしてくれなかったという。前例のないことは出来ない、と建前を繰り返すばかりの「公」と違って「私」には、こうしたホロリとなる話が幾つも転がっている》。

4

安泰な山手と悲惨な海辺の格差増大　誰が名付けたのか不明の「ライフライン」と称する奇妙な〝英語〟で語られるハードが元通りになるや、安泰な山手と悲惨な海辺の格差が増大してしまったことを田中康夫は指摘している（「そして、KOBE[2]」）。全国から集まった約一九〇億円の義援金によって全壊家屋に四〇〇万円、更に新築世帯に八五〇万円が支給された北海道奥尻とは異なり、総額では十倍近い義援金が集まったにも拘らず、一世帯当たりの分配は約一〇〇分の一である。しかし、神戸の人びとは「しゃあないわな」と呟くのみだと言う。神戸を走り続ける中で田中康夫が更に考えさせられたのは、三十年も前の文化住宅が窓ガラス一枚割れずに立っているのに、その隣の築後二年に満たない鉄筋コンクリートの建物が倒れていたりしたことであった。そこから、《技術という人間の叡智を遥かに超えて、直下型という天空の摂理は複雑で高等で気紛れだった。明らかにこの世の中には我々の力を超えたものはある。だが、それらを必要以上に怖がったりオカルティックに捉えて納得したりするのではなく、繰り返すが、在りのままの現実を冷静に直視することが必要なのだと思う》との理念を得、更に、《今度は震度7でも耐えられる新幹線や高速道路を作れ、というお題目の虚しさもこの点にある。そうした考え方は自然を冒瀆しているし、人間をも冒瀆している》との認識に達する。人間という動物の叡智の結晶である科学の発展は、底知れないまでに人間の生活に利便性をもたらし、豊かさを与えてくれてはいる。しかし同時にそれが反面、地球上の全生物の絶滅をも惹起しかねない危険性を有っていることもまた隠せぬ真実である。科学を手にした人間がどこまで謙虚さを手にすることができるだろうか。《自然を冒瀆》してはならぬ、《人間をも冒瀆》してはならないのである。倒壊した阪神高速の橋桁が片付けられた直後の国道43号線を通った時、そこは少なからぬ人々が命を落した場所であるにも拘らず、なんと明るいのだろう、なんと開放的なのだろう、有り体な表現をすれば、そこが非常

に人間的な空間に思えたと言う。《が、今はその場所に再びコンクリートの巨大な柱が建てられつつある。物質的復興は「公」や企業の資金によって着々と進みつつあるのだ。が、それは復興であって再生ではない。僕は「私」の精神的再生を幾何かでも手助けしたい。これまでも、そして、これからも》と田中康夫は書いているが、この獲得された理念こそが後年の自治体首長へと自身を駆り立てる基因であったに相違ない。

地震の前日まで神戸の人びとは田中の言う「なんとなく、クリスタル」な生活を送っていた。それどころか、《「神戸」のみならず日本全国の人々が、住まいこそ未だ兎小屋なれど、食べ物と着る物に関しては並べて「豊かさ」を享受していたのだ。にも拘らず、防災服に身を包んでヘリコプターから降り立った為政者は、「水と乾パンで耐え忍べ」と相も変わらぬ〝高校野球〟的精神論を説いた[3]》。という状況の中での被災者の「共同体の一員」としての意識を田中康夫は問題とした。都市ガスの復旧するまでは、誰もが行列に並ぶ被災者であり、被害は仮令窓ガラスの損壊程度であった人びととて、共同体の一員を構成していた。ところが、《春過ぎに自宅で入浴が可能となるや、忽ち共同意識は雲散してしまう。震災「前」の日常を着実に取り戻す人々と、震災「後」の非日常から依然として脱け出せない人々との違いが、一段と明瞭になってしまった。今後、如何なる精神的手助けを更に行ない続け得るであろうか、と僕が密かに悩み始めたのは、或いは夏前のこの時期からとも言える》と記さざるを得なかった。避難所やテント村には様ざまな人びとがいた。《我々は被災者なのだから、と声高に他力本願の〝権利〟行使を望む向き。「貰い癖が付いちゃって、いかんなあ」と言い訳し乍らも手を差し出して微苦笑する向き。或いは震災を契機に勤労意欲を喪失したのか、覇気の感じられぬ表情で終日所在無げな向き。三つに大別するならば、僕は真ん中の向きに共感を覚えたものだ》。好き好んでテント生活を始めた訳では決してないところの被災者の人びとについては繰り返して書いている。《生き埋めとなった近隣の人々を救出すべく無我夢中で作業を続け、真っ

暗になってから小、中学校へと家族と共に赴いたら、既に教室や体育館のみならず廊下も一杯だった。仕方無く、公園で一夜を過ごしたのだ。／二日目に、市からお握りと沢庵の配給が小、中学校へと届く。校庭に出来た長蛇の列に加わると、「外の人は遠慮して貰えるやろか」と絶対量が足りないのを理由に避難所の〝役員〟から断られた。「私達の公園にも配給をお願いします」と市役所の職員に掛け合うと「公園は避難所の認定を受けておらんから」と鐚(にべ)も無かった。配給が始まったのは四日目以降の話だ》。

大規模な郊外の仮設住宅　田中康夫は、地震後ほぼ一年経過した大晦日の夜、大規模な郊外の仮設住宅に足を踏み入れた高速道路の映像に息を飲みながらも、その直ぐ北側に広がる何百もの倒壊家屋の下で多くの住民が生き埋めとなっている状況を想像し得なかった自らの透視力の欠如を嘆きつつ、その一年後の現在、《瓦礫が消え去り、槌音が鳴り響く表層の光景のみを以って、既に神戸は落ち着きを取り戻したと復興の手応えを語るのは、些かならず浅薄過ぎはしまいか》との思いに捉われる。東灘区を始めとする旧来からの市街地の更地にポツポツとプレハブの商店や2×4(ツーバイフォー)の住宅が点在する状景を眼にし、なべて灰色がかっている色合いの所為もあり、極北の開拓地に迷い込んだかの如き寂寥感を抱いてしまう。その一方で、〝金妻〟的一戸建の立ち並ぶ西神ニュータウン（西区）の外れには、フェンスで囲まれた何千世帯もの仮設住宅が連なっていて、シベリアの収容所を思い出して震えが止まらなかったと入居時の自分を語る老人を前にして、十年前に訪れた南アの黒人居住区、ソウェトを思い出したりする。《〝アーバン・リゾート〟が復興のキーワードと首長は広言する。だが、その惹句は何年かに一度、神戸を訪れる観光客の為のものでこそあれ、生まれ育った愛する街に震災後も住み続けようと願う人々の為のものとは評しにくい》と、矢張り自治体・行政へと眼が向けられて行く。当然のことであろう。《ポートアイランド沖合いに海上空港を早期

実現させてこそ神戸復興の証たり得る、と「株式会社・神戸市」の宮崎辰雄特別顧問は真顔で語る。が、それは果たして透視力を持った御託宣であろうか？》。《政令指定都市の中でも、取り分け低福祉だと伝えられる神戸は、高物価・高租税でもある。にも拘らず、起債を元手にベルトコンベアで六甲山の土砂を運んで人工島を造り出して博覧会を開催しては帳尻を合わせようとしたバブリーな時代の自転車操業的錬金術から、未だ市も県も抜け出ていない》と批判する。

「スティル『神戸』」でも、続けて田中康夫は、同じ神戸市内にあって直下型地震であったが故の地域差に眼を向け、自治体の姿勢を問題にしている。

西神ニュータウンの位置する西区一帯は、地震発生当日の昼前には早くも電気が復旧した地域であり、家屋の倒壊は皆無に等しく、損壊も殆ど見られない。最寄り駅は市営地下鉄の終点・西神中央で、多くの建物が倒壊・焼失したのみでなく多くの人びとが圧死・焼死した長田区にある新長田駅からは所要二十分の距離にある。直下型地震であったが故の明暗の差は極めて隣接していたと言ってよい。西神中央よりも神戸の中心部寄りの名谷駅は分譲住宅と集合住宅が整然と建ち並ぶ辺りにある。この場所もまた、何時もと変わりなく地震発生当日も電気が点いていた。しかし、その地から地下鉄で僅か五分の、同じ須磨区の板宿（六甲山系の麓に位置する）の商店街は猛火に包まれ、にも拘らず消火に必要な水を確保できず、人びとは為す術を失っていたのである。《（長きに亘って市長を務めた前出の宮崎辰雄特別顧問は）震災直後、頭を垂れるどころか逆に厚顔無恥にも胸を張った。「私が開発した市営地下鉄沿線の住宅地はビクともしなかったではないか」と。が、その「開発」によって切り崩された丘陵の土砂で海上に生起したポートアイランドなる彼の〝自信作〟は、液状化現象と呼ばれる泥んこ状態に陥り、一旦緩急の際には指令本部が設置される筈だった兵庫県警港島庁舎は使用不能となった。／ニュータウンが「無事」だったの

は、活断層から外れていた偶さかの理由でしかない。「都市計画」という名の〝帳尻合わせ〟が勝利した訳ではないのだ。実は兵庫県と神戸市が口を揃えて、海上空港の建設こそは神戸再浮上の鍵、と広言するのも、同様の勘違いだと僕は思う》。《僕は神戸空港の命運を、福岡と宇部の既存二空港に挟まれて辛うじて一日二回、羽田との間をのみ百余名乗りの便で寂しく結ぶ同じく政令指定都市に位置する北九州空港に準える。／にも拘らずの県と市の大合唱は一体、何を意味するのか。その答えは、完成後も未だに手付かずの荒涼たる空地が広がるポートアイランド第二期埋立地に在る。近く始まる起債償還の資金的目処を立てる為にも、喉から手が出る程に彼らは空港が欲しいのだ。貨物基地を誘致出来たら資金繰りも、と皮算用している。「株式会社・神戸市」の相も変わらぬ自転車操業だ》。新空港の建設は種々の面で大きな問題である。海路の向こう側に関西空港があり、同じ兵庫県の伊丹市に大阪空港が存在する。必要性が殆ど認められない。更に大きな問題は、その建設の是非をめぐっての住民投票を要求する市民の署名活動が法定の数字を遥かに上回る署名を集めたにも拘らず、既定方針の故を以て市議会がいとも安直に却下してしまったことである。あれだけの数字の署名を門前払いにするとは民意の無視も甚だしいと言わねばならぬ。自治体の下す重大な決定については議会の決議ではなく住民投票に委ねるべきであるとわたしは考えている。然も永住している在日外国人にもその権利を認めた上での住民投票である。空港建設の是非をめぐっての住民投票の実施を拒否した神戸市議会の態度は、市民に対する犯罪行為であったと言ってよい。

ささやかな「公的援助」の願望　住居や事業の再建資金融資についても、神戸の人びとは、「只で万札を配らんかい」などと強欲な他力本願を「公」に突きつけようとはしなかった、と田中康夫は言う。保証人無しでも一千万円、否、二、三百万円の融資が受けられたなら、多くの人びとが職も住も再建して新たな意欲を湧き起こせるのに、ささやかな「公的援助」の願望しか表さなかった。《にも拘らず「中央」は未だに、「個人補償」は自然災

害には馴染まない、と強弁を続ける。冷害の認定を受けた農家に対する「個人補償」は昔から確立している一方で。「神戸」の人々は、繰り返すが、徒らに他力本願を求めているのではない。自力本願の自分達を後押ししてくれる「公的援助」を望んでいるのだ》と代弁する。地元選出の国会議員達が動きを見せなかったことを叩いた上での自治体の首長への手厳しい評言を以下に掲げておく。《〝冷血〟振りは、兵庫県知事や神戸市長とて変わらない。窓の外には火の手が上がっていたにも拘らず「迎えの車を頼む」と副知事からの電話で伝え、結果、地震発生から三時間有余も費して、公舎から僅か三キロの場所に位置する県庁へと到着した県知事。駆け付けた部下が運転する車の助手席で「阪神電車の高架がおかしい」「あのビルが壊れとる」と指差確認し続けた市長。／僕は当時、連載していた「神なき国のガリバー」なる拙稿で嘲弄した。迎えの車を只管、背広姿で待ち続けた旧内務官僚の流れを汲む天下りの「沈着」なる忍耐力。清き一票を以前に投じてくれたやも知れぬ路傍に横たえられた亡骸よりも建造物に目を向けた叩き上げの「冷静」なる観察力。（略）「溜飲が下がる思いだ」と僕に語り掛けてくれた人々は多い》。しかし、このような発言を続けた田中康夫に対する風当たりもきつかった模様である。《地元の新聞記者からは予期せぬ〝諫言〟を受けた。「常にクラシックのコンサートへは夫妻で訪れる〝文人〟県知事を苛めて欲しくない」と。将又（はたまた）、「ファッション都市・神戸」の将来を問うシンポジウムを企画したイタリアの著名銘柄（ブランド）企業は、「私共の市長と田中康夫の同席など断じて罷り成らぬ」との事務方の強圧に、僕の出席を諦めざるを得なかった。／彼ら二人が「文化」に造詣が深かろうが浅かろうが、僕には関係がない。抗争に備えて蓄えていた飲料や食料や何故か紙オムツをも即座に近隣の人々へ提供した広域暴力団の方が、人間としての勘性と温性は遥かに優れていると感じる迄だ。因みに勘性とは勘所、温性とは体温を指す》。

仮設住宅についての発言はまだ続く。例えば、平野町向井公有地という住居表示の下、〝高床式住居〟の様相を

呈していた、造成途中の傾斜地に機械的に並べられた仮設住宅についてである。一棟十世帯余りのこの仮設住宅は、傾斜地の上端に合わせて建てられているが故に、床の平行を保つ為に傾斜の下端へと近付くにつれ、板切れを床下で組み合せた〝木製ジャッキ・アップ〟が施されているものであったと言う。開発前は楪林であったその丘陵は、海沿いの市街地よりも優に三～四度は低い。《フェンスの外側の、平坦な敷地に建ち並ぶ分譲住宅の玄関灯が、何れも煌いて見える。実は仮設住宅の区画だけ温度が低いのでは、と猜疑心さえ生まれてしまう程、彼我の差は明白だ。高低差が一メートル近い〝高床式住居〟への出入りが老齢者でも可能な様にと篤志奉仕団体(ボランティア)が日曜大工で一世帯毎、ベニヤ板で作り上げた小さな階段を眺め乍ら、僕は自分の想像力の欠如を恥じた。どうして、もっと早く訪れなかったのだ、と》。田中康夫がこの仮設住宅訪問を後回しにしたのには無論理由があった。仮令壁が薄かろうと、少なくとも家賃の心配はせずに住む仮設住宅の人びとの許を訪れるよりは、避難所やテント村に依然として残っている人びとにまず幾何かでも他人を施し続けられるなら、と考えたが故にである。仮設住宅に入居出来た人びとは、少なくとも「他力」の点では恵まれている、との判断に基づくものでそれはあった。西神第一仮設住宅と呼ばれるその場所で、元旦に餅搗きの手伝いをした田中康夫は、以前に須磨区や長田区の避難所で顔見知りになっていた何世帯かの老夫婦と思いがけず再会した。七〇歳以上の二人住まいという条件で、地震から三か月後、募集・抽選・入居が最初に行なわれたそれは仮設住宅なのだということを後で知ったと言う。

自らへの問いかけ　「スティル『神戸』」の末尾に、著者は自らの思いを次のように記している。《九二年近くが経過して、その継続（神戸を訪れること―引用者）は僕の意地、単なる見栄、単なる傷の嘗め合いに過ぎぬ、とも評されよう。／が、思うのだ。被害者と加害者、被害者と傍観者。斯(か)くなる区分けしか語れない為政者や宗教者の巣くう社会こそは哀しい、と。倒壊した神殿の再建立に汲々とするばかりで、ほんの半月前の年末年始に賽銭

を投げ入れた近隣の被災者に境内を開放する事など頓と無かった、と放送の場で慨嘆すると、不敬な罵だと神社本庁関係者から訓戒の文書を受け取った。果たして、そうであろうか。共に施し、共に施される。それでこそ篤志奉仕（ボランティア）という相互扶助の潤滑油（メンタリティ）も日出（いず）る国に生まれ得るであろうに》。

「オン・ボランティア」[5]で、田中康夫は、ボランティアとは自分自身をも成長させてくれる思索的行為であると記した上で、但し、幾ら傍観者として長く居続けたところで相手の〝複雑な表情（おもい）〟を読み取ることは難しく、又、自分自身も温性は低いままで終わってしまうであろうとの自戒の念を述べ、前に掲げた神社本庁とのトラブルに再度触れつつ、《不幸にも日本では、民も上（かみ）に施し、上も民に施す相互扶助の精神が欠落しているのです。神が民に施すのは不浄だ、との温性の低さが根底に在ればこそ、神社本庁側からの僕に対する異議申し立ても行なわれたのでしょう》と確認した上で、更に、《而して人々の側にも、施して貰って当り前だ、との温性の低さが日本では目立ちます。御上（おかみ）なる言葉を僕が嫌いなのも、この点です。「御上の決めた事だから」と二言目には諦めの科白を吐く向きは、実は「御上に集れるだけ集っちまおう」とする他力本願の精神の持ち主ではありますまいか》との警鐘を鳴らすことをも忘れてはいないのである。

前に「四人への手紙」[6]で、非力だったのは為政者や宗教者だけではなく、「もう小説なんてどうでもよくなった。」「小説を書くこと自体、もう馬鹿ばかしくてね。」「もう、どーでもいい。まーったく、どーでもいい（笑）」とインタビューで〝万歳〟してしまった筒井康隆のうろたえ振りを取り上げた田中康夫は、《「ナンギやけれど……」》と題する「私の震災記」を上梓した田辺聖子女史の〝万歳〟も、例外ではありません。「みんな一生懸命働いてたんですね。貝原知事さんも笹山市長さんも、もうほんとうに何日も」、「一生懸命なさっていらっしゃったのでございます」と述べ、「しゃーないやん、地震も度が過ぎていた」と締め括る文章は、終戦直後の〝一億総懺悔〟

を想起させます》と田辺聖子を批判した上で、《ボランティアとは、身心を磨き清めた上で取り掛からねばならぬ崇高な善行という訳でもないのです。日頃の生活の中に幾つも切っ掛けは転がっていて、それは勘性と温性さえ持ち合わせていれば、容易に見出して実行に移せる筈です。にも拘らず、嘗ての僕もそうであったようにボランティアとは偽善だと早とちりした儘の人々が多いのは、知識と経験の二要素で構成される知性の内の前者のみを、ひたすら頭に詰め込み続け、勘性や温性を育ませる余裕も意欲も無い、幼少期からの日本の教育にも問題はあるのでしょう》とのボランティア論で『神戸震災日記』を閉じている。

地方自治体首長としての田中康夫　この後、田中康夫は二〇〇〇年十月に長野県知事に初当選。二〇〇二年七月に議会の不信任決議を受けて失職したが、同年九月に再選を果たし、現在に至っている。地方自治体の首長を志すに至ったのには阪神大震災のその地での活動で得た理念が大きく作用していることは相違あるまい。

二〇〇三年十月に、公演のため来日したフランスの歌手でありプレシー村長であるイブ・デュテイユさんと田中康夫・長野県知事が『朝日新聞』で対談している。[7] イブ・デュテイユさんは、同紙の紹介によると、四九年パリ生まれ。高校生のころから作詞作曲を学び、七二年プロ歌手としてデビュー。八五年、東京で初のリサイタルを開き、八九年プレシー村長に初当選。九〇年に環境保護運動団体を設立し、フランス功労賞を受賞。〇一年、村長に三選、という人物である。プレシー村はパリの東三五キロの地にあり、人口は五百人という。近隣の二つの村と共に給食センターを設け、子ども達は共同バスで毎日そこに通って昼食を取るとの話題を聞いた田中康夫が感心して、《重要なのは、行政が個人に立脚しているかどうかだ。お金は効率的に使われるべきだが、そのために個人の尊厳が失われてはいけない。給食センターに通うのには時間と労力を要するが、それは移動の過程で子どもが会話や景色を楽しむ、つまり個人として成長する代償ととらえるべきではないか》と発言し、話題が展開する。一部を以下に引

用しておく。

田中　米国は人口5千以下の自治体が8割、フランスでは9割を占めると聞く。同じ「小さな自治」から出発しながら、米国は村を囲い込み、保安官を置いて「よそ者から力で自分たちを守る」式の自治に進んでいった。今、そのスタイルを全世界に押しつけようとさえしている。「小さな自治」はもっと開かれた、地続きのものでなければ。個人に立脚しつつ広い公共性を追求するために、私もあたなも行政権を付与されている。

デュテイユ　権限を持った者に求められるのは、少しでも多くの人の声に耳を傾け、現状とは別の政策が可能かどうかに想像力を巡らすことだ。法の枠内でぎりぎりの解決を探る努力も必要だ。村が長年抱えてきた河川敷問題[8]でもそうだった。

田中　その話を聞いて、これこそ私たちが目指すべき行政のありようだと思った。住民のために何をすべきかを、住民との対話を通じて探っていく。日本は逆で、初めに防水ダムの計画があり、それに膨大なお金が投じられ、理屈は後から来る。この村の見学に行きたくなった。予算が付かないなら自費で（笑）。

デュテイユ　不法占拠の住民との話し合いは、それは難しいものだった。彼らにも学校に通う子がいて、その家の電気メーターが水没したら見捨てておけない。といって法が保障する措置はとれない。想定外の解決を迫られたが、強制退去を前提にはせず、10年かけて協議を続けた。やっと立ち退きが実現した跡地には木を植え、村で最も美しい散歩コースになった。村の取り組みの歴史を伝える記念緑地だと考えている。

文化人である首長が理想的であるなどとはさらさら考えないが、官僚的発想に堕しないのが何よりである。

5

わが街・長田への在日朝鮮人の思い

この章を閉じるにあたって、もう一度長田の地に視点を当てておきたい。

写真・牧田清、文・早川三郎『街が消えた　阪神大震災フォトドキュメント・神戸市長田の記録』[9]は、〈わが街、長田に思いを込めて〉の意図の下に長田から発せられた、渾身のレポートである。

大震災時、長田には約九千人の在日朝鮮人が住んでいた。仕事場が長田で、住居が須磨区という人も四千人位いるので、昼間の人口は約一万三千人に及ぶという。十人兄弟の末っ子として長田で生まれた四十六歳の李相泰さんは、「昔、長田の街は今よりもずっと活気があったんですよ。十代後半の頃です。でも神戸市が日本人の零細企業を救済するために日本人しか入れないゴム団地を作ったりしましてね。その時も下請けは韓国・朝鮮人でした」と語る。ケミカルシューズの工場のある辺りは一面焼野原になってしまった。在日一世時代の人情の残るゴム工場も殆どが倒壊、長田の生活基盤であるケミカルシューズの工場も全て灰になってしまった。「工場がなくなるということは、長田の街で働く在日韓国・朝鮮人の生活基盤がなくなるということです。そうなると、当然、働き場所を求めて大阪や京都に移り住む人が多くなる。じゃいったい長田はどうなるだろうか。人がいなくなれば文化も変わってしまいます。一世たちが作ってきた街、育てて来た文化が消えてしまうことになるんです。今まで神戸市は、過疎化した長田区や兵庫区をおきざりにしてきました。神戸市を作って来たのは長田区、兵庫区の人間なんですよ。それが今、消えようとしているんです」「一般の人たちは、三宮や六甲アイランドに象徴される美しい街が失われることを悲しんでいます。けれど、神戸の礎を築いた長田の街が失われようとしていることに誰も気づいてくれない。行政から忘れられた街から今度は震災によって気持ちまでもが失われようとしているんです。昔の古き良き街がまた一つなくなりました。そのうえ文化までもが失われようとしています。とても悲しいことです」―李さんの

憤りは果てしがない。

《都市復興計画の再開発重点地区に指定された長田の街は、これを契機に三宮のように都市化された街になってしまうのだろうか》との問いを発した上で早川三郎は、「その時、声を出さなければならないと思うんです。この街が真に再生するためにはどんな街づくりが必要か、長田の歴史は、そのまま在日韓国・朝鮮人の歴史です。民族の文化を育ててきたこの街を再生するためには、この長田の街にコリアン・タウンを作る以外にないと思うんです」との李さんの熱い思いを紹介している。《ケミカルシューズだけでなく、新しい産業もそこでは生まれるかも知れない、そして、市場があって住まいがあって、広場があるんです、と李さんは熱く語る。／個々の文化圏を持てる地域がこの神戸に、長田にあってもいいんじゃないか。民族の誇りと文化を育てる街を作ること、それが李さんの夢だ。／そしてそれはそのまま震災でなくなった人たちの果たせぬ思いであったかもしれない》と早川三郎は「わが街、長田に思いを込めて」の章を結んでいる。

〔注〕

（1）田中康夫「ゲンチャリにまたがって」（『日刊スポーツ』一九九五年七月三十一日～八月二十一日連載）

（2）田中康夫「そして、ＫＯＢＥ」（『神戸震災日記』に書き下ろしたもの）

（3）田中康夫「スティル『神戸』」（『新潮』一九九七年一月号）

（4）田中康夫「30年後の日本の衰弱を映す手鏡」（『週刊ポスト』一九九六年二月五日号）

（5）田中康夫「オン・ボランティア」（『神戸震災日記』への書き下ろし。文末に一九九六年十二月、と記されている）

（6）田中康夫「四人への手紙」（『週刊ＳＰＡ！』連載「神なき国のガリバー」一九九五年二月八日号～五月二十七日号）

（7）『朝日新聞』二〇〇三年十月三十一日付、主題見出しは「開かれた地方自治とは」となっている。

（8）村はマルヌ川に面して景観も美しく、パリ方面からピクニックに訪れる人が多い。ところがその一部の人びとが河川敷に勝手に家を建て、約六十戸が住み着き、不法建築の集落であるこの一帯では、大雨の度に浸水騒ぎが起きたという。

（9）『街が消えた　阪神大震災フォトドキュメント・神戸市長田の記録』（牧田清・早川三郎　遊タイム出版刊・一九九五年二月）